

白山麓焼畑出作り民の山地語彙 その1 - 地形中心に -

橋 礼吉・山口 一 男

SYNTHETIC STUDY OF MOUNTAIN VOCABULARY USED BY THE FOLK AT THE FOOT OF MT.HAKUSAN

Reikichi TACHIBANA, Ichio YAMAGUCHI

まえがき

かつて白山麓は、日本有数の焼畑地域であった。白山麓の焼畑とは、険しい山地の農耕的利用である。山は、尾根と谷、緩急斜面の複雑な複合体で、その地形は焼畑や実生活に多大に影響する。さらに土質の肥沃度、植生の違い、日照・風力・斜面方向等が、焼畑作物の出来具合に結びついていた。焼畑は出作りで経営されるため、山中に深く入りこみ、山に囲まれて、一軒家で、山と深くかかわってきた。実生活では、焼畑ばかりでなく、無雪期には野菜、木の実、キノコ、葉草の採取、積雪期にはブナ・ナラ材での木製品作り、さらには狩猟と、山全体と密にかかわってきた。出作りは、現今廃絶してしまった。と同時に、山全体と密接にかかわってきた生活も途絶えた。そのため、この時に使っていた山に関する日常的言葉（以下語彙と表現）も急激に姿を消しつつある。

この報告は、焼畑出作りをしていた人、積雪期に

狩猟をしていた人を訪ね、失われようとしている山地語彙を、可能な限り把握・記録することを意図した。

地形語彙

1. 大地形（9, 数字は採取語彙数を示す）

基準地点、例えば出作り小屋を基準地点とした場

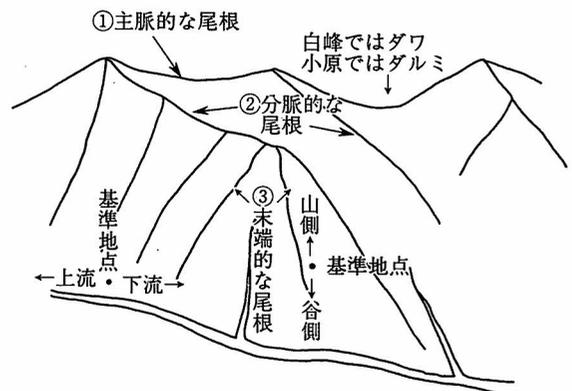


図1 基準地点と尾根

表1 山側・谷側方向と上流・下流方向に関する語彙

	白峰村白峰	白峰村桑島	尾口村尾添	河内村内尾	小松市小原
基準地点より山側方向	ヤマカタ	ヤマテ	オモテ	ヤマカタ	オモテ
谷側方向	ハマカタ	ハマテ	ウラテ	タニカタ	ウラ
基準地点より上流方向	オク	オク	オク	オモテ	賀上
下流方向	ウラ	クチ	クチ	ウラ	賀下

合、小屋場より山側斜面と谷側斜面を示す語彙。さらに基準地点より谷・川の上流と下流を示す語彙を表1で示した(図1とあわせて参照)。

同じ谷筋での白峰村白峰と桑島は、語彙のもつ内容は同じで共通している。ところで、尾添のオモテと内尾のオモテでは、語彙のもつ内容はまったく違っている。同じように白峰のウラと小原のウラは、まったく地形的意味あいが違うのである。

2. 尾根 (26)

尾根は、白山麓ではオネといわずオという。オは、県境・村境等の行政区の境界となっている例、さらには白山禅定道に利用されてきた例のように主脈的な尾根。さらに、その主脈的な尾根から、谷方向へ直角状に派生する支脈的な尾根。さらに末端の小さなものにおおまかに三分化して区別している。その三分化した語彙は、谷筋が違って大差は余り見られない(表2、図1とあわせて参照)。

表2 尾根の呼称

	白峰村白峰	河内村内尾	小松市小原
①主脈的な尾根	オオオ(大尾)	オオオ	オオオ
②分脈的な尾根	オボネ(尾骨) またはコボネ	オ	マタオ(又尾) または ナカオ(中尾)
③末端的な尾根	サシオ	サシオ	サシオ

尾根に固有名詞をつける場合があり、特に尾添でこの傾向が著しい。例えば岩間温泉元湯より薬師山への登山道がついている尾根を「薬師の尾」という。尾添では尾根を白峰のように三分化せず、主脈的なものと支脈的なものをまとめてオといっている。目附谷水系の支脈的な尾根にも固有名をつけた事例が目立ち、左岸にハナソソリの尾、タカツブリの尾、焼尾、トビレの尾がある。右岸にはノボリ尾、花切りの尾等がある。

ウマノセ：馬の背。尾根の両側が深く険しい谷にはさまれ、尾根筋が狭くやせた状態をいう。

オギワ：尾際。尾根の最高部より、少しさがった場所をさす。

オザキ：尾崎。尾根がおりてきて、最低部末端が谷と接する場所をさす。「尾崎、谷崎、宮の前」といって、住居建設地として避けてきた。尾崎は、土砂崩れ、雪崩の危険度が大きい。

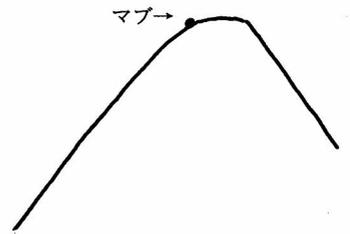
オのシリ：尾の尻。尾崎と同意語。

オのカシラ：尾の頭。尾根筋の最高部。

コエ(ゴエ)：越。尾根の鞍部で、両側の谷を結ぶ山道(峠道)がある場所をさす。白峰の太田越(明谷と太田谷を結ぶ)、ホイチ谷越(ホイチ谷と小又谷を結ぶ)のように固有名をもつと、その峠道は人の行き来が多い大切なルートで、休場がある。尾添では**コエド**という。

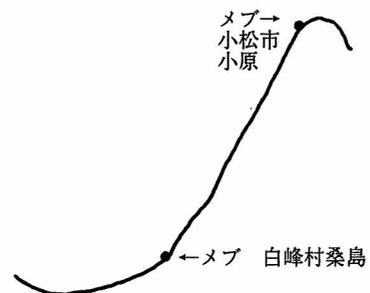
ダワ：鞍部の意味で、コエは、ダワを通るようにつけられている。**ヒクダワ・ダルミ**等の同意語がある。

マブ：尾根より谷に向かって斜面が下がる。尾根筋の地形が緩く幅広の時、斜面傾斜が急に強くなって下がる地点をさす。加賀禅定道の美女坂の上に、オセンスイのマブという地名があり、これに該当する。山の境界争い時、とがった尾根の場合は問題はない。緩く丸い尾根の時は、マブを境とする慣行がある。



ミズワカレ：水別れ。主脈的な尾根が分水嶺の働きをしているときに使う。「オが中ノ川と目附谷の水別れになっている」「あこまで登ると水別れ」等。同意語に**ミズナガレ**。

メブ：小松市小原では、白峰というマブをメブという。ところで桑島では、図のように斜面、尾根が下りてくる際、傾斜が緩くなる変移点をメブという。緩急変移点を共にメブというが、桑島と小原では意味する場所が全然違っている。



山のアタマ：主脈的な尾根で隆起している所をさす(主峰でない)。同意語に**山のテンコ**、**山のカムリ**等がある。

山のカクゴシ：オザキで、尾根末端が屏風のように切り立ち、風当たりが弱い場所。

山のツボ：尾根の鞍部のこと。**ダワ**、**ダルミ**等と同意語。

3. 谷 (38)



図2 谷の呼称

表3 谷の呼称

	白峰村白峰	河内村内尾	小松市小原
①主脈的な谷	オオカワ(大川)	オオタニ(大谷)	オオタニ またはオオカワ
②支脈的な谷	タン(谷)	コタニ(小谷)	タンコ
③末端の谷	ノマ	ノマ	ミソ(溝)

白山麓では、谷についてはタニといわず、タンまたはダンといっている場合が多い。タン、ダンに関しては、三ッ谷はミツタンで、ミツダンといわない。明谷はミヨウダンでミヨウタンといわない。同じように五十谷は五十タンでなく五十谷ダンである。地元では伝統的な慣習に従ってタン・ダンを使い分けているようだが、発音上言い易いように言っているのかも知れない。尾根は大きさ、長さ等により三つにランク分けして呼称差をつけていた。谷は尾根に対応する地形だから三つにランク分けしていた。すなわち主脈的な大きな谷、支脈的な谷、末端的な細い谷に三分し、呼称差をつけていた(図2、表3参照)。

支脈的谷は白峰ではタン、内尾ではコタニ、小原はタンコとばらつきがみられる。末端の細く小さい谷はノマが優勢で、積雪期に雪崩発生の頻度が高いので固有名をつける。旧桑島集落東島のオオノマや牛首川本流左岸(百万貫岩付近)のソウスケノマが具体例である。尾添では、ヌマともノマともつかない微妙な発音でいう。深谷源流のスゲノマ、山毛樺尾山尾添川斜面のオオノマ等がそれである。

ウオドメ：魚止め。丁寧にはウオドメの滝という。堰堤、ダムがなかった時代、鱒、岩魚がこれ以上上流域にさかのぼれなかったことの意味を込めた地名。目附谷にウオドメの滝、別名焼尾の滝がある。

オガミ：お拝み。谷の最奥部で切り立った壁をさす。仏像の真下で仏の顔を拝む姿勢に因んでつけられたもので、仏教と関連した語彙でおもしろい。

カタキ：空滝。雪解けの季節だけ水量のある滝。例として赤岩地内の不動滝(牛首川左岸、県道山側にかかっている小滝)。

カラダン：空谷。融雪期、降水時にだけ水流のある谷。

ガラダン：谷底の石、岩が大型でガラガラしている谷。

コエタン：越谷。峠に行く際、登っていく谷。登りつめた峠は、他所へ越していく山道であることに因んだもの。

カワガケ：谷底が割と開けて幅がある場合、流水周辺をカワベリまたは谷ノヘリ。山側寄り部分の緩傾斜地、平坦地をカワガケ(尾添)、タンコノフチ(小原)等という。

サカタン：逆谷。枝谷は本谷に直角に合流する場合が多い。稀に本谷上流部へ向かうように合流する時がある。逆谷とは、逆流するように合流する枝谷をさす。下田原川の逆谷が該当例である。

サブサダン：寒谷。川筋に地下水、清水の出る所が多いので、夏、水温が他谷より低くなる谷。下田原川の源流に寒谷がある。

サワ：沢。年中、水が少量絶えることなく流れており、全域が湿気の多い状態の小谷をさす。ワサビ栽培の適地になり易い。

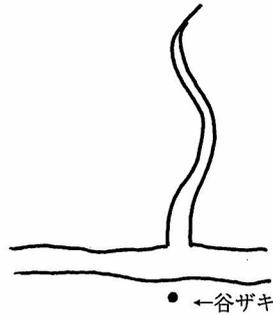
シブタン：細く短い谷で、春の雪解けの季節だけ少量の水が流れる所(桑島)。

スバル：谷の両岸が狭く切り立った岩壁となり、いわゆる廊下状となった所で、風嵐谷に「スバル」という地名があり、猟場になっている。白峰のスバルは、桑島ではセバト、内尾ではスバトという。

タニザキ：谷崎。谷の合流する周辺部であるが、支流が合流する対岸を限定的に指す場合がある。「尾ザキ・谷ザキ・宮の前(宮の高)」といって、出作り小屋を建てない場所としている。谷ザキは、大水害、大土石流時の危険度が大きいと予想され

る。

タニツボ：谷坪。二つの意味を持つ地形語彙。一つは谷壁が椀の底のような形をした状態を指す場合、他の一つは尾根、峰より谷を見下ろすと、見える範囲の領域を指す場合である。



タニヤ：最源流で、水が僅かチョロチョロと流れている状況の場所で、**タンニヤ**ともいう。

タニノケツ：支脈的谷が、主脈的谷と合流する所、さらに狭義には合流するちょっと手前部分。**タニノデト**も同意語。

タニノセメ：谷とは端的には凹部分。谷の最源流部でへこみ地形が切れてなくなった場所、**タニノシン**ともいう。

タニノフトコロ：谷の懐。谷壁が椀の底のようにへこんだ状態を、尾添では谷の懐、白峰では**谷坪**という。

デアイ：出合。合流地を指す。デアイと丁寧ていねいに発音せず、**デア**、**ディア**等と慣用している。

ニゴリダン：濁谷。雨が降り始めると、他の谷より時間的に早く、濁り水が出る谷。事例は下田原川上流の濁谷。

ヌクサダン：温谷。陽当たりが良く、流水の温度が高い谷。下田原川の源流では支谷は三分する。中俣なかつまを温さ谷、東俣あづまを寒さ谷、西俣にしをジコザカ谷という。谷川の対感水温の高低を地名とした事例として注目したい。

マスドメ：鱒止。滝が高いか、それともオーバハンク状になっていて、鱒、岩魚が登れないところを指し、**ウオドメ**と同義語。三ッ谷・東俣谷にマスドメという地名があり、現在発電所取入の堰堤がある。

ミズナシ：水無。名詞的に使うときは、融雪期や降水時だけ流れの見られる小規模な谷をいう。尾添地内、一里野奥の小ミズナシ谷、大ミズナシ谷が該当する。白峰の**カラダン**と同意語。「ミズナシになっている」と動詞的に使う時は、谷の水が伏流となって消えた状況を指す。直海谷川の旧奥池（廃絶）上流部が該当地である。

ミズホシ：水干。谷の最源流地タニヤで、僅かの水流か切れてなくなった所。

ミンジャノタニ：水屋の谷。小さく細い谷だが、四季を通して流れが涸れることがなく、飲料水水源として利用できる谷をさす。だから、古くより出作り小屋の水源地となり、出作り群があった谷筋には、この谷名が必ず存在する。事例として、岩屋俣谷右岸、三ッ谷・東俣谷右岸、明谷左岸、大杉谷左岸、五十谷左岸等にある。

4. 一般地形

山地斜面途中の小平坦地や緩傾斜地は、出作り小屋を建てるにも、焼畑を営むのにも都合が良い。ただし、大道谷西山の事例のように、緩傾斜地であっても地滑り地跡であれば、体験上営農効率が悪いので、出作りは立地しない。平坦地は、**ジャラ**、**バラ**、**ダイラ**、**バンバ**、**コバ**等の語彙が見られる。出作り地との結びつきでは**バラ**、**ジャラ**が多い。平坦地では、水平状態が完全に平つたい、すなわち水平に近い時は、**マンジャラ**と違って区別する。

山地には、急崖や岩壁は多くある。平野居住者にとっては、急崖、岩壁はどうしようもない場所に思えるが、岩壁は熊の生息地の猟場であり、急崖はゼンマイ、ギボシの群生地である。山村の人達は、平野居住者が絶対登れないと思っている岩壁を、何世代にわたってルートを探索し、勝れた登攀技術を駆使して上り下ろして活用している。だから、急崖や岩壁にも対応した呼称がつけられている。

平坦地・緩傾斜地についての語彙 (5)

コバ：山中や森林中のひらけた平坦地で、樹木伐採や炭焼き等の山仕事で小屋掛けし、根拠地とする場所。大杉谷のナナコバが該当する。

ジャラ：少し傾斜のあるまとまった平坦地、事例には大道谷のチョコジャラ、風嵐谷の十兵衛のジャラジャラ、目附谷のカメンジャラ等がある。

ダイラ：平。白峰スキー場のワラビ平・十二平が該当し、**ジャラ**と同意語。

バラ：原。**ジャラ**と同意語。百合谷の小糸原、大杉谷の苛原えら、宮谷のキワダ原、目附谷のムジナ原、ゲンダイ原が該当する。

バンバ：馬場。かなり高い場所の平坦地で、草地となっている所。旧越前禅定道のシマイバンバが事例。

傾斜の緩急についての語彙 (2)

サガシイ：急な状態を形容する用語。「サガシイ尾

根」とか「河内こうちの焼畑はサガシイ」等という。対語はナルイ。

ナルイ：緩い状態を形容する用語で、対語はサガシイ。例えば「ナルイ尾根」とか「ナルな尾根」という。

斜面・崖・岩壁についての語彙 (19)

イシナカベ：イシナとは石のこと。イシナカベは岩壁をさし、どうにか歩いて登り下りできる状態の岩壁。

イシナのトイ：岩壁の状態を形容する用語で、樋を横に何本も並べ連ねたようになっている状態の岩壁。

イチマイガン：一枚岩。岩壁の状態を形容する用語で、切れ目割れ目が少なく、さらに植生がなく露岩が続く、すべつとした状態の岩壁。

イワス：岩巢。岩壁で構成される山、岩山。例として目附谷左岸のウスイ山。

ガヤカベ：榧壁。ガヤ（チャボガヤ）の実には報恩講の茶菓子に利用した。ガヤは険しい尾根近くの岩場に自生する場合が多い。ガヤの実採取地となってきた岩場。

ガンカベがんべき：岩壁。岩壁の状態を形容する用語で、垂直状態の険しさで、攀じ登ることが殆どできない岩壁で、省略してガンという時もある。対語としてイシナカベがあり、これは登り下り可能な状況を意味する。

クズレカベ：崩れ壁。岩場とも崩壊地ともつかない場所で、岩は切れ目割れ目が多く、崖土がけつちも混じり、時々落石、崩壊が見られる。

ゲボシカベ：ゲボシ（オオバギボウシ）は水気の多い滝壺の壁や、湿気の多い谷壁に自生する山菜である。ゲボシ採取地として効率の良い岩場。

ゼンマイカベ：ゼンマイが多く自生している岩壁や急崖。

ゾロ：クズレカベの規模、具体的にはその高度差や険しさが桁外れに大きい場所をさす。該当地として中ノ川左岸の口ゾロ、奥ゾロがある。

タテイワ：立岩。谷底より、屏風のように切り立った巨岩。対語はヘライワ（平岩）。

ドカベ：土壁。急崖、壁状傾斜地が、岩より土で形成されている場所をさす。

ドッカベ：ガンカベと同意語で、攀じ登ることが不可能な垂直状の岩壁をさす。

ベタ：斜面のこと。北向き日当たりの悪い斜面をオ

ンジベタというように使う。

ヘラ（ベラ）：ベタと同意語。対岸の斜面をアツテラのヘラというように使う。

ヘライワ：平岩。谷底に、水平方向に幅広にひろがっている巨岩。対語はタテイワ（立岩）。

ヘラカベ：平壁。岩壁の状態を形容する用語でイチマイガン（一枚岩）が続く大規模な岩壁をさす。

崩壊地についての語彙 (5)

アカハゲ：赤禿げ。絶えず岩、土砂が崩れ、赤土の裸地を何年間も露出させ、草木が根付かない状況の崩壊地をさす。小原ではアカブケという。

ヌケ（ヌゲ）：抜け。崩壊事実が歴史的伝承となっている崩壊地跡で、植生の回復も見られる場所で、事例として風嵐谷の十左近ヌゲがある。

ヌケト：小原では大規模な山崩れはアカブケ、小規模な時はヌケトという。

湿地についての語彙 (9)

アマダレジ：雨垂れ地。湿地。同意語にシッケ（湿気）、サワタリ等がある。

カライケ：空池。池が滞水しないようになった、湿気が多い凹地をさす。

サワタンボ：沢田圃。田圃のように、平坦で割と広い湿地帯をさす。同意語にシッケワラ。

サワッポ：雨降りの後、水がじくじくと出てきて農耕できない場所。山麓線で、森林との境目付近の畑地にある。

フタイケ：蓋池。池が、土砂、落葉等の堆積で次第に浅くなり、水が涸れ始めてきた状態をさす。

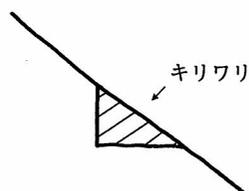
ヌマ：沼。雪解け季節に、窪地に周囲より水が流れ込んで、浅く、広く滞水する場所。小原山のイケノクボ（池窪）が該当する。

山道と地形についての語彙 (5)

オトシ：落し。谷・川の崖につけられた横まき道の途中、壁状に切立ち、歩行時に危険な地点をさし、臼オトシ、馬オトシ、嫁オトシ等の地名がある。

キリワリ：切割り。山道を作る時、急傾斜地を切り落した所。または、切り落して作った山道そのもの。

マド：窓。尾根・山が大きくV字型に切れた鞍部で、峠道の通過地となっ



ている所をさす。



ボウケ：歩危。オトシと同意語。内尾より奥池への途中、直海谷川右岸にシオボウケ（塩歩危）という地名がある。ダイナマイトがなかった時代、山道を作る時岩質が固く難儀した。この時の工法は、岩に塩を塗って火を燃やし、岩に亀裂を作ったことに因んだ地名との伝承がある。

ホリキリ：掘切り。山道で、両側に法面のある掘りこんで作った場所。または山道で、峠道に多い。



日照（斜面の方向）・風についての語彙 (12)

アサビナタ：朝日向。早朝より、陽がよくあたる斜面。または峰・山。対語はニシビナタ。

オンジビナタ：陰地日向。大局的には西向き斜面だが、南方向を向いているので、割と日照に恵まれている場所をさす。

オンジベタ：陰地ベタ。陽当たりの悪い斜面をさす。北斜面または西斜面で北方向を向く斜面。対語はヒナタ。

カゲトヤマ：陽当たりが悪く、農作物が不出来の作り地や山地をさし、**ビンボウヤマ**ともいう。

カザアナ：風穴。石・岩がごつごつと積み重なり、石・岩の隙間から空気が抜けている場所で、冬は雪が積もらない。該当地として、牛首川風嵐堰堤上流右岸のカザアナがある。

ニシビナタ：西日向。午後より陽が当たりは始め、夕方遅くまで陽があたる斜面。対語はアサビナタ。

ヒナタ：日向。陽当たりの良い斜面。広義には山地もさす。南斜面または東斜面。対語はオンジヒナタ。

ヒナタオンジ：日向陰地。大局的には東向き斜面だが、北方向を向いているので、割と日照に恵まれている場所をさす。対語はオンジヒナタ。

フキアゲ：吹上げ。風の通過地で、尾根直下の崖の土が強風で尾根上まで吹上げることによって因んだ命名。丸石谷右岸の土フキアゲが該当する。

フキムケ：吹向け。尾根筋上の風道。眺望に恵まれているが、常時強い風が吹き抜けている場所をさす。該当地として、チブリ小屋立場所をフキムケという。同意語にフキアテがある。

方向・広さ等についての語彙 (3)

アツテラ：あちら側という意味。例えば峠のアツテラ、尾根のアツテラ等のように使う。省略してアツテともいう。対語はコツテラ。

コツテラ：こちら側という意味。例えば谷川手前の手前平坦地をコツテラのジャラのように使う。省略してコツテともいう。

ハリ：斜面・平坦地・焼畑の広さあらわす。「ハリ」の大きいジャラ」「ハリ」の狭い小屋場」等に使う。広さが広い状態の時はオオハリという。

焼畑に関する山地語彙

焼畑は山地のどこでも可能なわけではない。海拔高度、傾斜の緩急、土の肥沃、日照の多少、水分の多少等の諸条件が満たされた時、焼畑は可能である。補足すれば、高度が高過ぎの場所では寒くて雑穀は育たない。傾斜が急であれば農地として利用できない。地力が劣れば作物は良く育たない。焼畑民は、これらの諸条件・諸要素を直感的に判断し、山地を選択して焼畑を営んできた。直感的判断を間違えると収穫高が少なくなり、食糧維持がむつかしくなる。諸条件が満たされた焼畑可能な山地をムツシ、またはアラシという（以下ムツシに統一）。白山麓は日本有数の焼畑地域であったから、焼畑に関連する独特な語彙が多く存在していた。以下、焼畑に関連する山地語彙をまとめた。

1. 焼畑適地ムツシ・アラシ (27)

地形が穏やかで地力の富む場所が、焼畑農地に利用され一般的にムツシ、奥池ではアラシという。

ムツシ：焼畑に適する山地、斜面。丁寧に表現する時文書では山ムツシとする場合もある。農耕を止め、植生、地力の回復を待つことをムツスといったらしく、それが名詞化したと思われる。

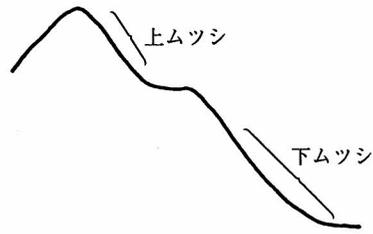
ムツシの波：ムツシの水平方向の凹凸、ナミの少ないムツシは農耕し易い。

ムツシワラ：急傾斜地、崖、巨大露岩が殆んどなく、山全体・全斜面が広いムツシになっている状態を

さす。

足の長いムツシ：高低差の多いムツシ。対語は足の短いムツシ。

上ムツシ：高低差の多い斜面の途中に平坦地がある場合、斜面は二分化されるようになる。上ムツシとは、平坦地より上部に位置するムツシをさす。対語は下ムツシ。



木ムツシ：高木にせよ低木にせよ、木が生えているムツシをさし、対語は草ムツシ。

草ムツシ：草だけが生えているムツシ。木が育たず草だけになっているのは、雪崩の通過地で木が根付かない時と、水分過多で根が育たない時がある。

桑ムツシ：ムツシの中に、ヤマグワ（山桑）植栽地がある場合の呼称。

ジョウデンムツシ：焼畑としての自然条件が良く、安定した収穫高が期待できるムツシ。

杉ムツシ：ムツシの中に、自然生えの杉が点在しているムツシ。

ハクデンムツシ：耕作条件が悪く作物収穫高の少ない劣悪なムツシ。対語はジョウデンムツシ。

ハシケムツシ：ハシケとは秋早く紅葉する木をさし、リョウブ・マルバマンサク・イタヤカエデが該当する。ハシケが多く自生しているムツシ。

ハンノキムツシ：ハンノキは肥えているムツシの指標木とする。ハンノキが多く自生しているムツシをさす。ハンノキは二種あり、灌木になるのはマルバオバル、またはサワオバルといい、高木になるのはハンノキオバルという。

ヒネムツシ：焼畑は火入れ後約5年耕作する。耕作を止めると植生は、元の伐採前の状況に少しづつ戻っていく。植生・地力が回復する期間を休閑年という。ヒネムツシとは、休閑年が長い状態のムツシをいう。対語は若ムツシ。

禪ムツシ：足の短いムツシが横広に、禪を横に広げたような状態に似ている時に使う（小原）。

平ムツシ：ナミの少ないムツシ。水平方向の凹凸がないので、水平方向に平べったいムツシという意味で、焼畑の耕作地としては適した山地。

マルバムツシ：マルバオバル（ミヤマカワラハンノ

キ）が多く自生しているムツシ。

ヤンバルムツシ：休閑回復して高木となった状態をヤンバルになったと表現する。クルミ、ハンノキオバル、キハダ等の立木状の樹木が多く自生しているムツシ（小原）。

若ムツシ：休閑年数が短く、植生・地力の回復が十分でないムツシ。

アラシ：尾口村東荒谷や河内村内尾では、白峰村、小松市新丸地区でいうムツシすなわち焼畑適地を、アラシという。

陰アラシ：陽当たりが悪く日照時間が短いアラシ。対語はヒナタアラシ。

近アラシ：白峰でいう若ムツシで、休閑年の短いムツシ。対語はヒネアラシ（内尾）。

ヒナタアラシ：陽当たりの良いアラシ。

ヒネアラシ：休閑年の長いアラシ。

2. ムツシの土壌 (23)

アカツチ：赤土。ムツシの土壌は、最上層に落葉、その下に黒色を呈する腐葉土が、さらに赤褐色のアカツチが層を形成する。痩せたムツシは、黒色腐植土が極めて薄く、腐植性分を含まないアカツチがすぐ現われる。指標植物としてキツネノカズラ（ヒカゲノカズラ）、イワナシ（イワナシとアカモノを総称した名称）。対語はクロツチ。

アカツチジョウデン：クロツチが極薄でアカツチ層が厚い下位のムツシであるが、最下位より少し良好なムツシ。またはその土壌をさす。

アカバンコ：アカツチは腐植性分が少ないので、足に硬くあたる。アカツチが一面に盤状となって広がった状態をさす（小原）。

イシコロワラ：岩塊が風化して石になるわけだが、乳児の拳状位の石が耕地一面に広がっている状態で、ダイコン栽培の焼畑には適しない。同意語にイシナワラ、ゴロスワラ（苛原）、ゴウロワラ（明谷）、ガンシキワラ（奥池）等がある。

カセジ：痩せた地面の意味で、同意語にハクデン。対語はジョウデン（苛原）。

クロツチ：黒土。肥えたムツシの土壌は、最上層に黒色・黒褐色をした腐植層が厚く層をなし、足を踏みこむと感覚的に柔らかくあたる。この腐植層の土をさす。対語はアカツチ。

コジャレ：岩が風化してできた小石で角張り、大きさはサクランボ位で、いわゆる角礫である。コジャレがクロツチに適宜交じると水はけも良く、最上

位のムツシ・ジョウデンとする。同意語としてジャレイシ、クロイシ(下田原)、マナゴ(大空・小原)等がある。

ジブク：クロツチの広がる地面、ムツシをさす。対語はハクデン(五十谷)。

シラハタ：クロツチの多い肥えた上位質のジョウデンと、アカツチの広がる痩せた下位質のハクデンとにムツシを大別するが、時にはその中間としてシラハタという等差を設ける。土質は薄青色で、粘土質である(小原)。

ジョウデン：ジブクと同意語。指標植物としてウド、アザミ。対語はハクデン。

チュウジョウデン：上位のジョウデンと下位のハクデンの中間だが、ジョウデンに近い中間をさす。

チュウハクデン：ジョウデンとハクデンの中間だが、ハクデンに近い中間をさす。指標植物としてカヤ。

テンテコバラ：アカ土は水分が少なく硬い。その状態をテンテコと表現し、アカ土がムツシ一面に広がる様子をさす(小原)。

ニガツチ：苦土。アカツチは口で味わうと苦味があるので、別名ニガツチともいう(河内谷)。

ハクデン：カセジと同意語。対語はジョウデン。

ヤセバラ：ハクデンすなわち下位の痩せた土壌が一面に広がっている状態をさす。

3. 焼畑地の微地形 (11)

アマダレジ：畑地に水分が多いとヒエ作柄にはあまり影響しないが、乾燥を好むアワにとっては好ましくない。雨が降ると湿気が多くなり晴天時も湿気の残る場所をさす。

アマツボ：雨坪。畑地斜面上のへこんだ場所で、かつ湿気の多い場所をさす。

オオクボ：大窪。大地形上の凹形斜面をさす。水分・有機成分が集まるので肥え、収穫も安定している。

クボト：畑地斜面上の部分的凹地で、肥沃で作りが良い場所。

シッケジ：畑地斜面の下部、谷川に近い場所で湿気の多い場所。

ダシ：強い降雨で、傾斜の強い畑地の一部(狭い)が崩れた場所。

ハチ：鉢。ダシの最上部は、どんぶり鉢の側面のように湾曲しているのが語彙由来と思われる。

ハナコキ：農作業をすると、畑地傾斜が急なので、

農夫の顔・鼻が畑地に接するほどの状態を表現したもので、非常に急傾斜の畑地状況をさす。

ハナバス：顔の鼻、その先端のもっとも高い部分をさし、「鼻っぱし」がたまった語彙かも知れない。鼻の先に因んで岩場、岩壁の最上部をさし、転じて畑地中に露出する大型の岩をさす(小原)。

バス：ハナバスの略語。ムツシ中の岩場、畑地に露出する岩、巨岩をさす。勿論耕作には不適。

マメコロバシ：マメ(大豆)が転がる程度の傾斜度を意味し、焼畑耕作者の感覚では耕地が急でない状態として把握する。

4. ムツシ地表面状の落葉層 (5)

ツツレ：年毎の落葉が、低温と乾燥で腐植が進まず、そのため落葉が幾重にも積み重なり、そこへ低木の細い根が縫糸状にはびこり、半腐植の部厚い層ができる。これをツツレという。本来ツツレとは、古着の痛み場所を古布で幾重にもつぎ張りしたものをさし、半腐植の落葉層がツツレに似ているのが語彙由来。焼畑をする時は、ツツレをはぎ起こし焼失しなければならない。

ツツレワラ：おおまかに標高1,000m以上で冷涼、さらに乾燥して湿気の少ないムツシ一面に、ツツレが広がっている状態をさす。

ブナツツレ：ブナ林にできるツツレ。

ナラツツレ：ナラ(コナラ、ミズナラ)林にできるツツレ。

ジャムネ：小松市新丸地区では、白峰でいうツツレをジャムネという。

5. 焼畑不適地 (9)

アラヤマ：標高が高ければ(おおまかに標高1,000~1,200m)、気温が低く作物の実りは良くない。ブナ林では伐採、火入れに多大の労力を費やし効率が悪く、尾根筋や斜面最上部を耕地にすれば雪崩発生源になるので焼畑は避ける。焼畑に利用できない山地を総称してアラヤマという(下田原、小原)。焼畑適地はどの谷筋でもムツシというのに対し、不適地は谷筋毎に慣用語が違っている。同意語にキリ(三谷)、ザツヤマ(木地小屋)、サンカ(赤岩、赤谷)、サンパク(須納谷)、サンリン(苛原、東荒谷、内尾)、ダケ(五十谷)、ダケヤマ(大空、下田原)、フカヤマ(須納谷)。

6. ムツシの境界 (18)

焼畑の耕作限界線

クワイリザカイ：鋳入り境。焼畑民は、何世代にもわたる体験より、これ以上の海拔高度では焼畑の効率が悪くなるという高度限界を認識している。谷筋の最奥の出作り地が焼畑の高度限界でクワイリザカイという。クワイリザカイは谷筋によって高度が異なり、大杉谷では松左衛門山1,350m、岩屋俣谷ではチョウイチ小屋場1,630m、湯ノ谷では庄兵衛山1,200mが該当する。

ツクリザカイ：作り境。クワイリザカイと同義語。

焼畑適地ムツシと不適地アラヤマの境

ハエザカイ：生え境。焼畑とは、20年前後の休閑年を経て植生、地力が回復したムツシで営む。だから休閑年の短いムツシの樹木は年若い木々が多い。対するに不適地のアラヤマは永代に焼畑に利用できないのだから、樹木は大木となっている。したがってムツシとアラヤマの境は、樹木の生長差が歴然としているので、語彙由来となった。

ムツシザカイ：ハエザカイと同義語。

ムツシとムツシ (私有山地と私有山地) の境

山地が単なる森林ではなく、農地に有効に転用できるとなると、私有地ムツシとムツシの境は、時として争いの因となる。だから、ムツシとムツシの境は判別しやすいようにしておかねばならない。

ウドモチザカイ：境界に沿って意識的にウドを間隔的に植え込んだ状態。ウドは株になって生長し、根が深い。意識して絶やそうとしても株が多く、根が深いので困難をとまなうので、境の印としては良い (内尾)。

オザカイ：尾境。尾根 (オボネ、サシオ) を境界とした状態。

カブザカイ：株境。短期間で成木し、さらに何本もの株を作る性質の木を境に植えた状態。内尾ではコヤギ (柳)、ミズラを植える。

クネザカイ：内尾でいうクネとは、白峰、内尾、尾添でいうマブのことで、マブザカイ参照。

ノマザカイ：谷の末端というか、非常に小さい急な谷をノマといい、冬季に雪崩が発生する時は固有名詞がつく。このノマをムツシの境とする場合。

マブザカイ：内尾でいうクネザカイと同義語。

ミゾザカイ：白峰でいうノマザカイと同義語で、小原の慣用語。

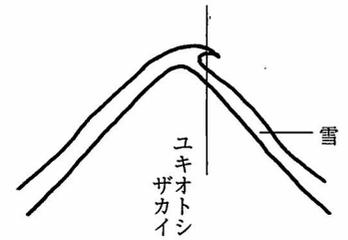
ミズワカレザカイ：水別れ境。尾根筋がとがっている場合は尾境とも、水別れ境ともいう。

ムスビザカイ：結び境。境界になり易い尾根、谷がない時、内尾ではネソ、ミズラ、ハンノキ等の細く、若く、柔らかい幼木を見つけて結んでおく。大きくなるにつれて結び目がタンコブとなり境界の目印となる。

メンザカイ：須納谷では、尾根筋が平たい時、急に傾斜が落ちこむ^{かど}角の場所を境界とする場合。

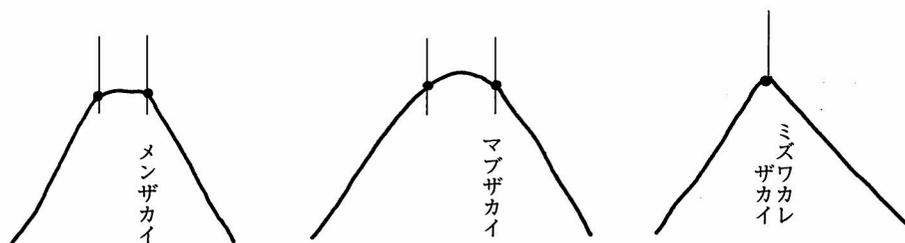
ユキオトシザカイ：

雪落とし境。冬、尾根の積雪状況は風下側に張り出すように積もる。風下の庇状積雪が段差を作る所をユキオトシまたはユキモチといい、この場所を境界とする (内尾)。



山地の植生に関する語彙

焼畑をする時は、地面の肥えたところを選んで行う。どこが肥えているのかの判断の一つに自生している木の観察がある。「この木は肥えた山に生える」「この木があるから地面は肥えている」と判断した。炭焼きは、材質の硬い原木を利用すれば効率が良い。硬い木は、どんな地形、どこの場所に群生しているのか等、平素から観察していなければならない。草ワラ、木ワラの語彙のように、白山麓では群生地をワラという。その群がっている規模は、約10本のクリの場合もクリワラ、1,000本位のブナ原生林もブナワラといい、使い方に幅がある。



さらにワラという語彙は、山菜やキノコ類にも使う。例えばウドワラ、マイコワラ等である。さらに土質にも応用し、礫分布地にはマナゴワラ、イシコロワラ等という。とにかく山地を覆っている木、草を始めとして、土、礫までも含め、同じものが広がって存在する時、ワラという語彙を使って、山地の生態をおおまかに把握し、説明している。

1. 林・樹木群生地 (19)

ウツギワラ：ネゾレワラは焼畑休閑地に多い。低木のネゾレは伐採にタチキより手数がかからず、再度焼畑に利用するのに便利良い。ネゾレワラで最も肥えているムツシ指標木はオバル(ミヤマカワラハンノキ)群生地、次に肥えているのはタニウツギ群生地ウツギワラとする。

オバルワラ：ミヤマカワラハンノキ群生地で、焼畑の単位面積当りの収量が最も多い、肥えた山地とする。

カナギワラ：材質の硬いものを総称してカナギという。コナラ、ミズナラ、ミズメ、マルバマンサク、ヤマモミジ、イロハモミジ、クマシデ等が群生している場所で、焼畑にとってはやせた山地とする。炭の原木採取地としては最適。カナギの対語はヤコギ。

キワダワラ：黄蘗原。キハダ群生地。キハダは樹皮をむき染色剤、漢方薬剤として出荷する。キハダは有用樹だから、焼畑時伐採することはない。

キワラ：草群生地がなく、木ばかり生えている山地。転じて造林地で杉ばかり生えている山地を指す時もある。同意語にキノコワラ。

クリワラ：栗原。出作り小屋が建つ平坦地を小屋場といい、これに隣接した場所にクリを植樹してクリワラを造成し、木の実を採取する。クリの古木にはマイタケが生えるものもある。焼畑用地に当てることはない。

クワラ：桑原。クワワラがつまった語彙。焼畑跡地にヤマダクワ苗を植樹して造成した桑群生地。ムツシの肥えた所を選んで植樹している。

シノギワラ：積雪期木全体が雪に埋もれてしまう位の低木をシノギという。ミヤマカワラハンノキ、タニウツギ、リョウブ等が斜面一帯に群生している様をいう。シノギの対語はタイボク。

スギワラ：杉原。杉の造成地で端的には杉林をさす。

タイボクワラ：タイボクとは巨木を意味せず、シノ

ギの対語。いわゆる普通の立木状の林をさす。

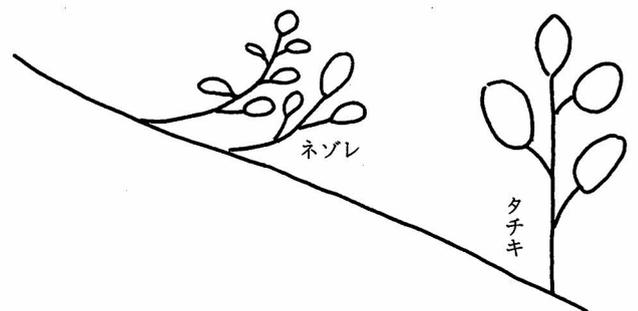
タチキワラ：立木原。立木とは立っている木。だから普通の木、樹高の高い木が群がって林を作っている様や場所。

トチワラ：栃原。谷筋や湿地にトチノキ群生地がある。木の実を利用する有用樹だから伐採することは少ない。小屋場近くのトチワラは、植樹したものかも知れない。群数はクリより多くない。

ナラワラ：檜原。白峰でいうナラとは、ナラとホウソナラ両者の総称である。ナラとはミズナラ、ホウソナラとはコナラの地方名で、その群生地ナラワラの面積は広い。ナラは、カナギの代表格で、木炭の原木にとっては最高材質で炭窯はナラワラに作る。焼畑にとってはナラワラはやせた山地の最たるものとする。

ネソワラ：ネソとはマルバマンサクの地方名で、茅屋根構造材の結束に使う有用樹で、ネゾレの代表格。茅屋根の葺き替えや補修時、非常に多くのネソ本数が必要となり、ネソワラが大切な採取地となる。

ネゾレワラ：ネゾレとは、雪の圧力で根元より曲がって生長した低木で、シノギともいう。ミヤマカワラハンノキ、タニウツギ、リョウブの群生地で、焼畑にとっては肥えた山地で最適地とする。



ハンサワラ：ハンサとはミズメの地方名でその群生地。ハンサはソリの滑走板として利用する有用樹である。

ブナワラ：ブナ林と同意語で、まとまった数でワラを形成する。タイボクワラ、タチキワラを代表する植生である。ブナワラは、ナラワラより肥えた山地とする。時には焼畑に利用するが伐採後の木の総量が多いので焼却に手数がかかる。ブナは、除雪用コシキ板、鋏の柄等に利用する。

ホエワラ：ホエとは燃料に手頃な細い木をさす。ネゾレワラには、ホエに適する木が多く自生している。

ヤコギワラ：材質の柔らかい木を総称してヤコギという。トチノキ、キハダ、ヤマハンノキ、オニグルミ等で、肥えて湿気の高い山地に生える。対語はカナギワラ。

2. 草原・草群生地 (3)

カヤワラ：茅原。出作り小屋の屋根は茅葺きであった。茅屋根は葺き替えをしなければならず、茅群生地を管理した。この場所をカヤワラとかカヤバという。

ノマクサワラ：ノマとは谷の支谷さらに末端の極小の谷で、時には雪崩が発生するので木が育たず草地となっている場合が多い。ノマにはシシウド、ウド、アザミ、イタドリ等が生えている。これらの草をノマクサといい、緑肥とする。その群生地をノマクサワラという。

ヒエダクサワラ：稗田草原。ヒエ田の緑肥にする柔らかい草ヤコグサの群生地をさす。緑肥用の草は、シシウド、オタカラコウ、イタドリ、ヨモギ、アザミ、トリアシショウマ、オヤマボクチ、オオバギボウシ等で、ヒエ田ばかりでなく常畑にも必要で、多量を山地より採取しなければならず、その群生地は大切な場所であった。

3. 山菜群生地 (7)

語尾に「ワラ」をつけた語彙に共通することは、人間にとって有用な草、木につけている場合が多い。山菜についてもワラをつけている。具体的には、アケビワラ、ウドワラ、クグミワラ、グミワラ、ゼンマイワラ、フキワラ、ワラビワラ等である。そして各自が秘密のウドワラ、ゼンマイワラをもっており、その場所をシンガイバといっている。

4. キノコに関するもの (1)

マイコワラ：マイコとはマイタケの地方名である。マイコは、槲、栗の根元に生える。マイタケは、山菜のように毎年たくさんとれるものではない。しかし安定的にとれる樹林をさす。

5. その他 (3)

カヤバ：茅場。茅は屋根材料、さらにはカリボシとして馬小屋の敷草や肥料材料等、多目的に利用する。毎年、茅を刈り取る場所をさす。

クサバ：草場。ヒエ田、常畑の緑肥として多くの草が必要で、毎年利用する場所をさす。他家の草場

の草を借りる時もある。

ハナキリバ：花切場。白山麓の積雪期間は長い。この期間、仏壇には花卉付きの生花を献花できない。そのため晩秋に、献花用のヒメコマツ、アカミノイヌツゲを採取して貯える。ヒメコマツは岩場に、アカミノイヌツゲは深山の尾根筋に自生する。仏壇用の常緑樹を採取する特別な場所をさす。

林野利用に関する語彙 (8)

山地で焼畑に充当する場所をムツシというが、山地の全領域がムツシである筈がない。すなわち、部分的に炭焼きに利用している樹林地もあれば、緑肥として草刈りする草地もあれば、燃料を採取する低木林もあれば、雪崩予防のため伐採しない樹林もあれば、狩猟する岩場・急崖もある。焼畑民は、山地・林野をどのように利用しているかで呼称を作り、おおまかに領域区分・機能分化をしていた。

カサギヤマ：笠木山。カサギとは桧笠の材料で自生桧より作る。桧は岩場や急峻な尾根筋に自生している。仮設小屋を建て、桧を伐り、笠木に加工して出荷する生業もカサギヤマ、その小屋建設地、作業場所もカサギヤマという。白峰村市ノ瀬、赤岩、三ッ谷でおこなっていた。

コスキヤマ：コスキまたはコシキとは除雪板のことでブナより作る。農閑期・積雪期にブナ林で小屋掛けして作る。その生業と作業場所をさす。バンバヤマともいい、白峰村市ノ瀬、赤岩、三ッ谷でおこなっていた。

スミヤマ：炭山。炭を焼く山地で、ナラワラ、カナギワラでおこなう。

バイタヤマ：薪はその太さにより名称が違う。細目のものよりホエ・バイタ・トネとよぶ。薪は、焼畑伐採作業を通して確保し、利用しないものは火入れで燃やす。この時のバイタでは足りない時、薪採取地のナラワラ、すなわちバイタ山で燃料を確保する。タキモンヤマは同意語。

ハルキヤマ：春木山。早春、雪の斜面が氷化して固くなった時、伐採した薪、杉用材をソリを使って雪上運搬する。その作業と場所をさす。

ボウヤマ：棒山。棒とは鋤の柄をさす。ブナ林やミズナラ林に、積雪期に小屋掛けして鋤の柄を作る。その作業と、その場所をさす。白峰村の市ノ

瀬, 赤岩, 三ッ谷でおこなっていた。クワガラヤマともいう。

所有に関する語彙 (6)

出作りは, 小屋場を含めた山地が自己所有であれば, 何世代にもわたって永代に同一場所で生活できる。出作り地が, 他人所有地であれば, 借用年限が切れると他所へ移らなければならない。しかし再契約で年限が更新できれば, 移らないですむ。出作り地が, 明治初期国有地になると, 私的な出作り, 焼畑を認めなかったのか, 借地料が高額であったのか, 多くが離村した。焼畑民は, 焼畑, 養蚕, 炭焼き, 木製品作り等を営む山地が, 自己所有であったか, 他人所有であったかで, 社会的地位や収入面で大きな影響を受けた。

ウケヤマ: 請山。山林地主所有の山地を借りている状態や, その場所。対語はジヤマ (自山)。

カンリン: 官林。国有林のこと。

ジヤマ: 自山。自己所有の山地や, 出作り地。モチヤマ (持山) ともいう。

ソウヤマ: 総山。共有林のこと。

ネンキヤマ: 年期山。ウケヤマと同意語。

あとがき

今回の調査では, 273の山地語彙を採取した。特

色的なのは, 焼畑に適する私有山地と私有山地の境界の決め方である。山地が, 単なる樹木が生えている傾斜地でなく, 食糧生産に利用できる耕地となると, その境界は所有者間でしっかり決めておかなければならない。分水嶺尾根の地形によって, ミズワカレザカイ, メンザカイ, マブザカイ等の多様な決め方を採用した。境界となる小谷, 巨岩等がまったくない時は, 多くの株に生長するウド, コヤギ(柳)等を植栽する方法をとったり, ネソに結び目を作ってタンコブを形成させる方法をとった。ユキオトシザカイは, 雪庇の張り出しで境を決めていたというが, 豪雪地に居住しない筆者には分りづらかった。

調査にご協力いただいた方々は次の通りである。私的時間を割いていただき, 末尾ながら厚くお礼を申し上げる次第である。伊藤常次郎 (加賀市, 大正11年生まれ), 北村秀一 (尾口村, 大正15年生まれ), 内藤長松 (河内村, 大正11年生まれ), 西岸貞秋 (白峰村, 昭和2年生まれ), 林 源常 (尾口村, 昭和4年生まれ), 尾田清正 (白峰村, 昭和6年生まれ), 尾田敏春 (白峰村, 昭和16年生まれ), 尾田好雄 (白峰村, 昭和8年生まれ)。なお, 研究費の一部は, 白山自然保護研究会の研究費を充当させてもらった。あわせて感謝の意を表する次第である。

参考文献

白峰村史編集委員会 (1959) 白峰村史下巻, 323-333, 白峰村役場, 石川県